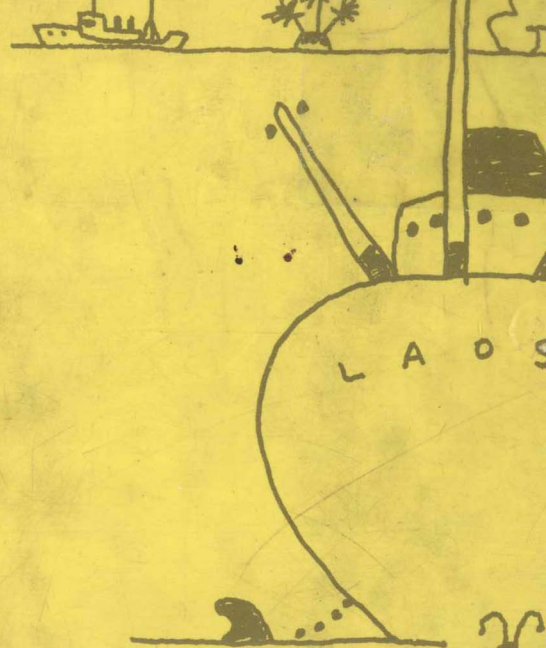
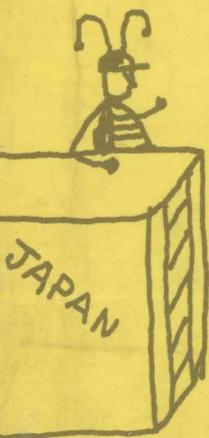


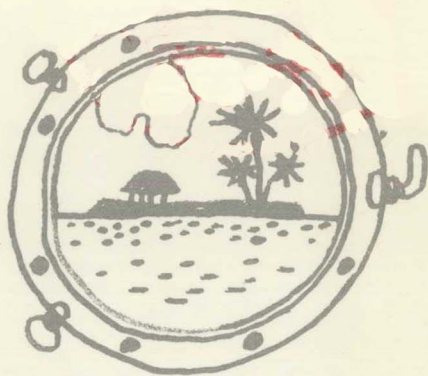
高みの見物

北杜夫



高みの見物

北 杜夫



新潮社版

高みの見物

一九六五年一〇月三〇日 発行
一九七一年二月二五日 一八刷

定価 三五〇円

著者 北 杜 夫

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇三〇二二番(大代)
電管 東京 八〇八番

印刷 株式会社三秀舎
製本 大進堂製本所

(落丁のものは本社又はお買求めの
書店でおとりかえいたします)

目

次

目玉医者	七
出生を語る	一八
帰港	三〇
新しい家	四六
四文作家	六四
さまざまな体験	八〇
すし屋にて	八六

ゴキブリ騒動

勝手な生物

念力と見合

ぶっつけ本番

旅支度

船出

船上の事件

一〇二

一二〇

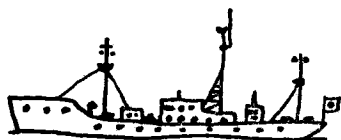
一三四

一四八

一六二

一八三

二〇三



裝幀 宮田武彦

高
み
の
見
物

目玉医者

揺れている。ゆったりと揺れている。右にゆれ、左にゆれ、それから上下に揺れている。

それがもう二カ月の余もつづいている。

といて、なんの不思議もないことなのだ。ここは船の中だからである。水産庁の漁業調査船「大洋丸」の船中なのだ。

「大洋丸」なんぞというところ、いかにも堂々とした大船を連想させるが、実は六百トンしかない小船にすぎない。「小洋丸」とか、あるいは「水タマリ丸」とでも改称したほうがいいかもしれない。

従って、その船室も、ごく小さくて狭いのもやむを得ないといわねばならぬ。ベッドは二段の寝棚になっていて、少し背の高い人は、いくらか足をちぢめないと寝られない。

船窓の下に細くソファアールが作られている。ソファアールという聞きがよいが、実は低い腰かけにすぎぬ。床の面積は、人間が三人も並べばギッシリつまってしまうくらいのものだ。

壁に、一応机がある。これもごく狭い。その机にむかって、一人の男がひどく真剣になにやら数えている。

「ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう……」

机の上にはビースの罎が開けられていて、そのそばに何十本かのタバコが取りだされている。この男は、そのタバコの本数をかぞえているのだ。

「十五、十六、十七、十八……」

男はよれよれのポロシャツを着ている。ズボンもこれまたよれよれの半ズボンだ。もっとも、船はいま南海を走っているのだから、この一見だらしない恰好もなかばやむを得ない。

背はむしろ低いほうだ。ずんぐりとして足が短く、スタイルこそよくはないが、ころぶのは上手そうだ。

度の強い近眼鏡をかけている。頭はボサボサしている。額は広いが、頬からアゴのほうにかけて、次第に尻つぼみになっていて、三角形のオムスビを逆さにしたような恰好をしている。年は三十を幾つか越したくらいか。

要するにあまり美男子ではない。否、断じて美男子では

ない。

「三十、三十一、三十二……」

と、彼はなおも一生懸命になって、タバコの数をかぞえている。なんでこんなにムキになって数えているのか。

そのとき、ドアがノックされた。そして、返事を待たずに、ドアがあげられた。

その前から、この部屋はエンジンの音でかなりうるさかったのだが、いったんドアがあげられたとなると、エンジン・ルームがすぐ前にあるらしく、ドツとけたたましい噪音がとびこんでくる。

その音響と共に部屋にとびこんできたのは、作業服姿の船員であった。いきなり大きな声で言った。

「ドクター、腹具合がわるいんで」

この会話でもわかるとおり、タバコの数をかぞえている眼鏡の男は、この船の船医なのである。ほかのときこそ役目がないが、病人がでたとなれば、診察し治療する任務をもつ船医なのである。

それなのに、このドクターは一向に動じない。

「なに、腹具合？」と彼はごく簡単に言っていた。「そんなら胃散、隣りの部屋！」

「隣りの部屋？」

と、その船員は問い返した。

「隣りで診て頂けるんで？」

「そうじゃない」

と、ドクターは椅子にデンと腰をおろしたまま、

「隣りの治療室に戸棚がある。その中に胃散のびんがある。君、自分でそれを持って行って、飲んでみたまえ」

「じゃあ、診察は？」

「まあ、いいだろう。胃散をのめば大丈夫さ」

「胃散なんかでいいんで？ もっと高級な薬はないんですか？」

「ゼイタクを言うな、まず胃散をのんでみて、それでも効かなかつたら、べつの薬をあげよう」

船員は、これはダメだというふうに着をすくめた。それから、あきらめたらしく隣りの治療室へ行ってゴソゴソしていたが、やがて手に薬の袋をもってできて、

「じゃ、とにかくのんでみます」

と、ふくれたように言い、部屋を出て行った。

あとに残ったドクターは、

「待てよ、三十三、だったかな？ それとも三十四だったかな。とんだ邪魔がはいってわからなくなってしまううた。畜生め、まあいい、はじめから数え直すか」

そして、またもや、

「ひい、ふう、みい」とはじめだした。

これは、有体にいつてひどい態度ではなからうか。いくらなんでも無責任すぎはしまいか。

と、わたくし——この「わたし」が何者であるかは、いずれあとになってゆっくりと説明しようと思う——は、こういう光景をこれまでにさんざ見てきているから、べつだん事改めておどろく気にもなれない。

もともと、わたしはこの大洋丸に、ときどきの陸上生活をのぞいて、もう二年あまり乗っている。そして、主にこの船医の居室に根城をかまえている。従って、これまでにわたしは何人も船医の人となり、その日常、その診察ぶりを見てきているわけだ。

大洋丸は、短くて二カ月、長くて半年という具合に、世界各地の海で漁業調査をくりかえしている。そのたんびに船医が変る。日本内地に帰港している期間も長いので、航海のたびごとに、新しく船医をやとうのだ。

しかし、船医になろうという医者はそうはいない。おまけに六百トンの船だ。船医として好適なのはむしろ外科医だが、大洋丸には今まで一べんも外科医が乗ったことがない。耳鼻科、産婦人科、精神科などが、これまでわたしの知っている船医であった。そして、今いるこのドクターは、眼科のお医者なのである。

それにしたって、今度の眼科医ほどひどいナマケモノの

医者をわたしは見たことがない。

「二十、二十一、二十二……」

と、彼はタバコの本数をかぞえている。

そのとき、また新しい患者がやってきた。油に汚れた作業衣からみて、機関部員らしい。

「ドクター、風邪ひいたんです」

「風邪？」と、うわの空でわがドクターは言った。「二十三、今度は忘れないぞ。なんだ、君、風邪だって？」

ドクターは、ようやくこちらに向き直ると、じろりと相手を見た。

「どうして風邪だとわかるんだね？」

「それは」と、機関部員は言った。「喉も痛いですしね。

鏡で見たら赤くなってるんです。水っぱなも出てね。それから、熱もありまさあ」

「なるほど」

と、ナマケモノの眼科医は言った。

「しかし、風邪は万病の元という言葉がある。風邪だと思っていると、それが脳膜炎の初まりだったりすることもある」

相手はギョツとしたらしい。しかし、すぐにヘラヘラ笑って、

「御冗談を、そんなら、ちよっくら診察して貰いますかね

え」

「まあ待て。ちょっと舌を見せなさい。ああ、なるほど、これは脳膜炎じゃない」

「そんなカンタンなことでもわかりますか？」

「むろんわかる。これは単なる風邪だ。ええと、二十三、だったかな？」

「あっしは二十六ですよ」

「いや、年を聞いているんじゃない。こちらのことだ。とにかく、これは風邪だな。アスピリンをのみたまえ。隣の部屋にあるから、自分で行って、持って行きたまえ」

患者の顔には、争いがたい不信の色が浮かびあがった。

「アスピリンですかあ」

と、口をとがらして、

「ドクターは、風邪には全部アスピリンしか出さないって噂だね」

「そうだよ」

「それから、胃腸がわるいっていうと、全部胃散だって」

「そうさ」

「しかし、この船にはもっと高価な新薬だってどっさり積んである筈ですぞ」

「ばかな。新薬をありがたがるというのがそもそも間違いないのだ。治らんとときには、ほくはちゃんとそれなりの薬を

あげる」

「そんなものですかねえ」

「そんなもんだよ」

「そいじゃ、やっぱりアスピリンで？」

「くだいねえ。アスピリンで大丈夫だよ。ほくはいま忙しいんだから」

機関部員はあきらめたらしく、それでも多少うらめしげに、隣室の治療室へ消えた。

あとに残ったドクターは、

「二十四、二十五……」

とタバコを数えだす。

すると、機関部員がふたたび治療室から現われて、なんだか嬉しげに、

「ドクター、『強力ナオール』という薬がありました、こっちの方が効きそうだから、こっちを頂いて行きますぞ」

「強力ナオール」

と、ドクターは呟いた。

「はて、そんな薬があったかしらん。まあ、いい。なんでも持って行きたまえ」

と、極めて無責任な態度である。

それから、機関部員が行ってしまったと、さらにこんなハレンチな言葉を呟いた。

「こう丁寧に診察しては身がもたん。このタバコにしても、さっきから何遍数えなおしたか、わかりやしない」
 そして彼は、さも腹立たしげに、眼鏡を光らせ机の上のところがっているピースを、ひととき猛烈な速度で数えだした。

「三十、三十一、三十二、三十三……」

ドクターは、今度こそ邪魔されずに、最後までタバコの本数をかぞえあげた。

「四十八、四十九、五十と、やはり五十か」

彼はなんだがガツカリしてしまったように咳いた。

「やっばり五十か。ううむ」

正直のところ、このドクターは閑すぎるのである。大体病人がきても、診察もせずに、「胃散！」「アスピリン！」で追いはらってしまうのでは、結局やることなく、ついにはやらずともいいことをやりだすのも無理からぬことであろう。

先日、彼はピースの新しい罐を開けたとき、ふと一抹の疑惑を覚えた。それは五十本入りの罐である。しかし、たまには、四十九本だったり、五十一本だったりすることもあつたのではないか。

よし、ひとつ、それを捜しだしてやろう。そして四十九本のピース罐を見つけたら、専売公社に投書してやろう。

大体こんな考えは、よほど閑で退屈してないと浮んでくるものではない。しかし、船の中では、まして半分余計者の船医の身では、その閑と退屈がたっぷりあるのであつた。それ以来ドクターは、新しい罐を開けるたびに、せつとその本数をかぞえる次第になつたのだ。

「こいつも五十本か」

彼は、のびかけた頤ひげをなでながら、ブツブツいう。「してみると、結局みんな正確に五十本なのかもしれないぞ。もつとも、機械でつめるんだらうからなあ。機械では正確なわけだ。あれだけの苦勞をして、どうやら無駄骨を折つたらしいぞ」

それから彼は、机の上に取りだしたタバコを罐に収めはじめた。ところが、もともとギッシリつまつていたタバコであるから、いったん取りだしてしまうと、なかなか元のように収まらない。

「おかしいぞ。一本余ってしまうぞ。ううむ、これはよほど素晴らしい技術を用いて入れてあつたにちがいない。さすが専売公社だ」

つまらないことに感心して、しきりと頤を撫でている。よほどの超閑人とみえる。

「もつとも専売というからは、一手に独占して暴利を得ているにちがいない。正確に見事に五十本入れるくらいのも

ことなんか、考えてみれば当然だ」

こんなことは、なにも考えてみなくても、当然と思える。

そんなふうには、ドクターが顔をなでながら、およそ無益な考えにふけていると、またもやドアに乱暴なノックがあつて、一人の男がはいってきた。

さつきまでのが平船員なら、今度のは士官である。チーフ・オフィサー（主席航海士）である。もっとも航海中だから、やはり作業衣すがたで、とりわけキリリとしているわけではない。

「ドクター、お忙しいですか」

「なにね」と、ナマケモノのドクターは平然として厚かましい言葉を吐いた。「いささか忙しかつたですがね。いま、ようやく一段落つこうかというところです」

「なにかお仕事でも」

「なに、ちょっととした学問上の疑惑につき当つたもんですからね。いろいろと悩んでいたわけです」

と、ドクターはあくまで厚顔である。

「どうもお邪魔するようで申し訳ないですが」

と、チーフ・オフィサーは部屋の隅っこにあつた丸椅子を引き寄せて、腰をおろした。

「なに、かまわんです。ほくは邪魔されるのには慣れてい

ますから。ところで、チーフ・オフィサー、このピースの罐ですがね」

ドクターは、その濃紺の丸い罐を手でもてあそび、

「これには一体タバコが何本はいつていると思ひますか？」
「というのは、新しい奴……、つまり、この罐が何本入りかつてことですか？」

「さよう」

「だったら、五十本に決まつてるじゃないですか」

「本当にそう思ひますか。どれもこれもみんな五十本だけ？」

「そりやそうでしょう。だって、そもそも五十本入りの罐じゃありませんか」

「なるほど」

ドクターは、たいそう感じ入つたようになぜか独り言のように呟いた。

「そんなふうには単純に考へたほうが利口か知らん。しかし、それでは真理の探究というわけにはいかんな」

「ピースがどうかしましたか？」

「いや、なんでもありません。ところで、なにか御用件でも」
「それがですねえ、ドクター、どうも言ひにくいことなんですが」

と、チーフ・オフィサーはちょっと照れたように笑つ

て、

「どうも航海も長くなると、いろいろと病人もあって、ドクターとしても大変でしょうがね」

「いや、それほどでも」

「ところで、甚だ申しにくいんですが、その診察についてのことですかね」

「ほほう、なんですか？」

「そう改まられると困るが、つまり、ドクターの診察は、あんまりカンタンすぎると、こういう意見もあるわけです」

「……」

「カンタンというより、何も診ちゃあくれないと、こう言ってる者もいます」

「……」

「で、こう申しちゃああなたが、もうちょっと丁寧に診察してやるわけにはいかないですかねえ、ドクター？」

ドクターはしばし沈黙した。内心むっとしたのかもしれない、或いは困惑したのかもしれない、と思われたが、わがドクターはなかなかこのくらのことで恐れ入るような男ではなかった。

「ぼくの診察がカンタン、そりやそれでいい。ところでこの船では今まで死人が何人出ました？ いや、ぼくが船医

として乗りこんでからですかね」

「死人？ いやなことを言わないでくださいよ。そんな者がいるわけじゃないですか」

「それなら重病人で半死半生の者は？ ベストとコレラは？ この船は病人だらけで幽霊船のようになってますか？」

「とんでもない。どうも大きいですな」

「べつに幽霊船でもないとなると、病人はちゃんと治っているわけでしょう？ そうすると、ぼくの治療について、とやかくいわれる道理はないですなあ」

「そういう意味じゃないですよ」

と、チーフ・オフィサーは慌てたように手をふった。

「なにもドクターの治療法がわるいというんじゃないですよ。ただ、もっと心理的な問題ですよ。なにせこういう大洋のまっただ中ですから、船員てものは大胆なようできて、どっか心細いんですよ。それが身体の具合がわるくなると、ドクターに診て貰う段になって、聴診器ひとつ当てられないということが心細いんですよ。どうです、ドクター、せめて聴診器をもう少し使いなすっちゃあ。聴診器にだって、カビが生えるかもしれないしね」

終りのところは、少々皮肉っぽく言った。だが、ドクターは一向平気である。

「聴診器になんぞいくらカビが生えても、ほくは困らんですよ」

「そりやまたどういわけです？」

「大体ほくは聴診器を使わないからね。ほくはそもそも眼科医ですからね」

「そりや知ってますが、少しは使うでしよう？」

「ところがほくは使わないんです。たとえ使ったとしても、……たとえはこの胸のところに聴診器を当てる。すると

心臓の音がする。また肺臓の呼吸音を聞いたとしても、はっきり言っちゃえば、ほくにはなんにもわからんです」

「なんにもわからない？ そんなことないでしよう」

「いや、わからんです。断じてわからないんです。ほくは目のことしかわからん」

と、ドクターは、まるで威張っているかのように、いやにはっきりと断言した。

「そりやひどいなあ」

と、チーフ・オフィサーも、いささかあきれたような声を出した。

「しかしドクター、そもそもお医者さんてものは、医学百般を一応全部習うわけでしょうが」

「そりや習います」

「それなら、専門外のことだって少しはおわかりと思いま

すが」

「インタン生なんて一応各科をみんな浅く知ってるわけですよ。ところが、ほくのように大学の医局にはいつて何年も経つと、ほかの科のことなんかあらかた忘れてしまうものです」

「だって、今まで本船には、精神科だの耳鼻科だの医者が乗っていたが、一応みんな専門外の診察もちゃんとやってきましたよ」

「それは……ほくが思うに、彼らはヤブ医者だからです。専門家として一家をなしてないわけですな。ほくらいの眼科の専門家になると、ほかのことは、もうニキビひとつ治す自信がなくなるものです」

「専門家はけっこうだが、それじゃ困りますなあ。もし盲腸の患者なんか出たらどうします？」

「まあ船に全速力を出して貰って、一番近い港に急行して貰うより仕様がありませんね」

「ドクターはそうカンタンに言いますがね。船の予定を変えるということは、これは大変なことなんです。港に一日入港するんだって、莫大な費用がかかるんですぜ」

「そんなこと言っても仕様がな。ほくは眼科医、それも腕ききの専門家なんだから、それを承知でやとった役所がわるいってことですな。たとえばここに、白内障そくひのびでも網膜